

## 指導教員によるコメント

東インド会社によって17～18世紀のヨーロッパに大量に持ち込まれたインド綿布は、ファッションや日常生活の面でヨーロッパ人の感性に大きな影響を及ぼした。そればかりか経済発展を促し、産業革命へ至る技術の革新を生み出したという意味においても、歴史のなかで果たした役割は大きく、産業・商業・貿易史において少なからず研究がなされてきた。服飾文化史としては概説的、または個別の調査が若干あるのみであり、17～18世紀ヨーロッパ服飾史の重要な課題として残されている。権裕美さんは、このような視野で修士論文以来この領域の調査に当たっており、今回はフランス国立図書館に所蔵されているリシュリュー・コレクションの織物見本帳、及び綿布の輸入と製造で知られた南フランスで描かれ、今日に残された絵画史料を特に調査の対象としている。フランス語では綿布は総称としてアンディエンヌと呼ばれているが、生産地や、輸入に携わる中東の商人、また経由地によって多彩な名称が記録されており、そこにさらに国内生産の模造品が加わり、織物の技法や特質とその呼称との関係は複雑な状況を呈している。今回の調査は、この点を明らかにする基本的な調査であり、新たな研究の展開が生まれることと期待している。

**徳井 淑子（お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科 教授）**